

編集後記

新潟県中学校教育研究会

理事長 鈴木 善士

(新潟市立木戸中学校 校長)



「深い学びの技法」を基に構成する学習過程の充実に着目して

国立教育政策研究所が公表した令和7年度全国学力・学習状況調査の結果によると、次のようなことが指摘されています。

- ・主体的・対話的で深い学びに取り組んだと考える児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られる。
- ・主体的・対話的で深い学びに取り組んだ児童生徒は、SES（家庭の社会経済的背景）が低い状況にあっても、各教科の正答率が高い傾向が見られる。

これらの傾向は、令和7年度に限った特筆すべき事象ではなく、ここ数年同様の指摘が見られます。学校教育が目指すべき方向を示すとともに、学力差の問題を家庭や地域の要因だけに求めてはならないという厳しい指摘にも聞こえます。

新潟県中学校教育研究会は、「深い学びの20の技法」を授業の手立てとして導入し、「深い学びにいたる授業」を目指して研究に取り組んできました。結果、授業改善の視点の明確化や、生徒の実態に合わせた柔軟な技法の選択等が研究の成果として報告されています。一方で、深い学びの技法が、本来は手段であるにもかかわらず目的化してしまったり、技法の種類が多すぎて学習課題や生徒の実態と結びつかなかったりする事例もみられました。

本年度は、研究主題を「深い学びにいたる授業～『深い学びの技法』を基に構成する学習過程に着目して～」と設定し、それを具現化するための3つの重点を掲げ研究に取り組んでいます。技法が単発的に手立てとして講じられるのではなく、生徒が情報を集約したり、考えを表現したり、課題を解決したりして学びを深めるように、生徒の学びの流れに合った手立てを講じるように改善し、生徒の学習過程の充実に着目して研究を進めていきます。「深い学びの技法」は生徒の学び方であるとともに、教師の「手立て」でもあります。「設定」「思考・解決・表現」「評価」という3つの学習過程の中で、深い学びの技法を適切に取り入れ、生徒自身が「深い学び」にいたったと実感できる授業こそ、今求められているものと考えます。

この度、京都大学大学院准教授 石井英真様より特別寄稿を頂戴いたしました。ご多用の中、ご寄稿賜りました石井英真様に深く感謝申し上げます。石井英真様は現在、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会の委員として、次期学習指導要領に向けた内容の重点化・構造化の在り方、学習評価の在り方等に関して、重要な検討の視点を提示されています。本稿寄稿文もいつでも読み返していただき、会員の皆様の授業づくりの参考にしていただければ幸いです。

本研究会は、2年間の指定研究推進事業と、その研究成果を全会員に伝える「授業情報誌 Class」の両輪でこれからも本県中学校の授業づくりを支えていきます。指定研究に携わられた関係者の皆様と、貴重な原稿を頂戴した各全県部長・副部長・指定研究会場校の皆様、各研修推進委員の皆様、編集に携わった事務局に感謝を申し上げ、編集後記といたします。